

〈特集〉英語モジュールと社会言語学的変異研究

イントロダクション

KANDA×TUFSS 英語モジュール ——開発の意義と特徴——

関屋 康、矢頭 典枝、フィリップ・マーフィー

The Development of the KANDA×TUFSS English Modules: the Significance and Characteristics

SEKIYA Yasushi, YAZU Norie and MURPHY Philip

This is an introductory article which describes the background, the process of the development and the features of the “KANDA×TUFSS English Modules (Dialog),” a free online learning website which depicts the linguistic and cultural differences in major English varieties of the world. We first point out the diversification of English varieties observed in educational institutions in Japan where American English is basically regarded as the norm, and then give an outline of the studies of World Englishes, a field of Sociolinguistics that has been studied extensively by researchers worldwide in the last few decades. Finally, we explain the features and functions of the English Modules and conclude by giving a brief summary of the articles that follow.

キーワード: KANDA×TUFSS 英語モジュール、World Englishes、
社会言語学的変異研究

1. 日本の教育現場における英語の多様性

グローバル化時代の現在、日本人は世界の多様な英語に接する環境に置かれることがますます増えている。日本人の海外渡航は今日ではごく普通のこととなり、英語圏への留学先や旅行先として北アメリカ以外にオセアニアを選ぶ人も増加している。英語を国際共通語とするビジネスの世界に

目を向けると、全世界に進出し、特にアジア諸国に拠点を移す日本企業の数が増加するなか、日本の企業人は現地の多様な英語に接している。

日本の教育現場においても、近年、英語の多様性が顕在化している。今では世界中の様々な国を出身国とする外国人が日本の英語教育の現場で教えている現状が観察される。小・中・高等学校に配属される外国語指導助手(ALT: Assistant Language Teacher) 招致の制度を例に挙げれば、初年度の1987年、招致相手国はアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの4カ国であったが、2014年現在、42カ国にのぼる。英語を教えるALTの招致相手国は、2014年度、多い順に、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、アイルランド、ジャマイカ、シンガポールであった¹⁾。

大学においても学生たちは多様な英語に接触している。神田外語大学では、73名の英語を母語とする語学専任教員²⁾が英語教育に従事している(2014年度)。彼らの出身国は、多い順に、アメリカ、イギリス(ウェールズとスコットランドを含む)、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、である。複数の外国人教員の多様な英語に触れて戸惑う学生たちから以下のような声が聞かれる。「アメリカ人の先生は“organize”と綴るのに、イギリス人の先生は“organise”と綴る。」「オーストラリア人の先生が言うtodayがto dieのように聞こえる」、「アイルランド人の先生はbutをbotのように発音する。相当ナマっている」、「スコットランド人の先生の発音ってわかりにくい」。そして、われわれ日本人教員に次のような質問をしてくる学生もいる——「どの英語が正しい英語なのですか」、「どの英語を身につければいいのでしょうか」といった質問である。日本の中・高等学校の英語教育の現場では、いわゆる「アメリカ標準英語」が事実上規範となっており、CDなどの音声を含む教材や高校入試・大学入試もこれに基づいて作成されている³⁾。そのため、北アメリカ以外を出身地とする外国人教員の増加による現在の教室における英語の多様性は、学習者たちをしばしば戸惑わせる。例えば、「週末に」は、アメリカ英語では“on the **weekend**”であるが、イギリス人教員が教えるとイギリス式の“at the **weekend**”となり、前置詞もweekendの発音も異なる。生徒たちは、イギ

リス英語で覚えてしまうと、受験では間違いとなってしまふ。

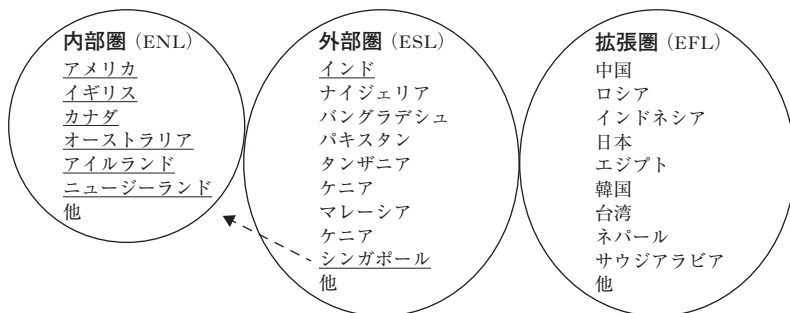
神田外語大学のように、多様な英語圏から教員を募集し、意図的に学生たちが多様な英語に触れることを可能にするカリキュラム編成をしている大学は他に例を見ない。日本では、一般の大学はもとより、中学校や高校、それに近年、英語教育が導入されるようになった小学校まで、英語の多様性を受け入れる環境が整っていないといえる。規範主義⁴⁾に基づいて運営される日本の英語教育の現場に、発音、語彙、綴り字、文法などが異なる多様な英語変種が現在入ってきているため、教育を受ける側の生徒たちだけでなく、日本人教員も戸惑う状況が報告されている⁵⁾。

「神田外語大学 (KANDA) × 東京外国語大学 (TUFS) 英語モジュール」(以下「英語モジュール」) はこうした背景のもとで誕生した。日本の英語教育界において英語の多様化が現実となった今、日本の英語教育に従事する人々は率先して英語の多様性を前向きに捉え、アメリカ英語以外の英語は「間違い」であるという認識を改めるときに来ている。英語モジュールは、英語を専門とする教育者や大学生だけでなく、幅広い層の日本の人々が、多様な英語変種の違いを体系的に学習することを可能にするツールとして発案された。

2. World Englishes 研究と英語モジュール

学術的な潮流として、1980 年代より英語圏を中心に言語研究、特に社会言語学の分野において世界各地で話される英語変種についての研究、すなわち World Englishes と呼ばれる研究分野が発展してきた⁶⁾。この分野の先駆者である Kachru は、不可算名詞である筈の English を Englishes と複数形で表し、「英語の三つの円 Three Circles of English」の概念を提唱した。このなかで Kachru は、英語を母語あるいは第 1 言語として使う国々を「内部圏 Inner Circle」(イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、アイルランド、ニュージーランドなど)、公用語あるいは第二言語として使う国々や地域を「外部圏 Outer Circle」(インド、ナイジェリア、シンガポールなど)、外国語として学校教育のなかで教えている国々や地域を「拡張圏 Expanding Circle」(日本を含む多くのアジア諸国やヨーロッパ諸国)に

図1. Kachru (1985) の「英語の三つの円」
(矢印は本稿筆者たちによる加筆)



大別した⁷⁾。世界の言語のなかで、英語は唯一、母語としてよりも第二言語あるいは外国語として話す人が多い言語である。英語が世界の共通語といわれる所以である。内部圏の「英語＝母語 English as a native language (ENL)」話者は3億5千万人以上、外部圏の「英語＝第二言語 English as a second language (ESL)」話者も3億5千万人以上と推定され、拡張圏である「英語＝外国語 English as a foreign language (EFL)」話者の数は、この部類に属する話者の英語能力に幅があるため推定困難であるが、「ある程度の英語能力を有する者」という大雑把な基準を使えば、10億人以上と推定され (Jenkins 2003、pp. 15-6)、今後も増加の一途を辿ると予測される。図1は、Kachru の「英語の三つの円」を英語話者の人口が多い順に表し、英語モジュールの開発対象である英語変種が話されている国には下線が引いてある。

このモデルは、実際には複雑かつ流動的な世界の言語状況を単純化して示していると批判されることがある。例えば、シンガポールは、英語を公用語の一つとし、国内の異民族集団間 (多数派である中国系、少数派であるマレー系、インド系) の共通語として位置づけてきたが、近年、英語 (シンガポール口語英語) が同民族間であっても共通語として使われ、また、家庭内で親子・兄弟間でも使われ、母語化している状況が観察される。つまり英語への言語シフトが起こっているといえる⁸⁾。図1の矢印は、シン

ガポールは外部圏から内部圏へとシフトしつつあることを示している。

とはいえ、Kachru の「英語の三つの円」の概念は、布石として World Englishes 研究の発展に貢献し、現在まで、この分野で多くの著書⁹⁾や研究論文が出版されてきた。これらの World Englishes 研究は、「世界に存在する様々な英語変種は言語学的、社会的、文化的に異なり、話者の文化を反映」(Kirkpatrick, 2007:3) し、ある変種が他より優れているわけではない、というメッセージを発している。

また、日本においても、1990 年代より世界の様々な英語変種に関する学術的研究が現れ始め、とりわけ「アジア英語」への関心が高まり、1998 年に「日本「アジア英語」学会」が創設された。その創設者、本名信行は「英語はアジアの言語」でもあり、アジアの人々は「自分が属している民族と文化を意識し、自分を国際的な場面で表現する道具として、英語を使おうとしている」¹⁰⁾ と述べている。本名による「アジア英語」と異文化理解に関する一連の著作¹¹⁾に始まり、近年、World Englishes 全般についての邦語による論文や一般向けの著書¹²⁾が多数出版されている。

World Englishes 研究の実践的応用として、TOEIC のリスニング問題の改定に注目したい。旧 TOEIC のリスニング問題では、アメリカ英語のみが使用されていたが、2006 年より、イギリス英語、カナダ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語の母語話者の録音も使われるようになった(新城・矢頭、2014)。アメリカ標準英語を聞き慣れている日本人英語学習者にとって、イギリス英語とオセアニアの英語は聞きにくい、という声がかかれる¹³⁾。

英語モジュールは、内外のこうした動向のなかで開発された。開発対象として、まず、Kachru の「英語の三つの円」の内部圏に属する主要国の英語変種で、かつ、上記で触れた TOEIC のリスニングの問題で使われる五つの国の英語を選定した。第一弾として、現在の日本の英語教育で事実上規範となっている「アメリカ英語」を取り上げた。発音の面では、東部(ニューイングランド地域)方言の発音やいわゆる「南部なまり」を除く、アメリカ合衆国の広範囲で話されている「一般米語 (General American)」が使われることをアメリカ英語モジュールに関する冒頭の説明のページで

明記した。

「イギリス英語」は地域差が極めて多く、従来、その標準的な発音とされてきたものは「容認発音 (Received Pronunciation (RP))」と呼ばれてきた。RPは「BBC英語」とも呼ばれ、イギリスの国営放送 British Broadcasting Corporation (BBC) のアナウンサーたちの多くが話す英語として認識されている。しかし、RPは上流階級の発音が元となっているとされる社会階層的な英語変種で、その話者の数はイギリスの総人口の数パーセントにも満たない。そこで、RPではなく、ロンドンを中心とする広域で話され、RPに近い発音から、労働者階級の人々が話すと思われるコックニーに近い発音までを含む「エスチュアリー英語 (Estuary English)」¹⁴⁾ が使われることを説明のページで明記した。

地理的な近接性の影響と両国の密接な歴史的関係のため、語彙、発音の両面においてよく似ている「オーストラリア英語」と「ニュージーランド英語」は、地域差はあまりないが、社会階層の面から cultivated (教養のある、イギリス英語 (RP) に最も近い)、general (一般的)、broad (訛りが強い) の三つに分類される。英語モジュールで使われるこの二つの英語変種の発音は、出演者の発音に個人差があるにせよ、概して general であることを最初の説明のページに明記した。

「カナダ英語」について TOEIC の受験者からよく聞かれるコメントは「アメリカ英語との違いがわからない」というものである。実際、カナダ英語とアメリカ英語は、日本人英語学習者はもとより、カナダ人やアメリカ人であっても聞き分けられない、という調査結果がある (矢頭、2014)。この調査結果を踏まえ、カナダ英語モジュールでは以下の点を最初のページに明記した。1) 発音面ではアメリカ英語の標準的な発音 (一般米語) といくつかの言語項目を除いて同じである、2) 語彙の面では、生活用語に関しては、アメリカ英語と概ね同じであるが、イギリス英語と同じものもあり、他の英語変種と同様、カナダ固有の語彙も存在する。

上記の5つの英語変種のモジュールは、2014年末現在、すでに公開されている。Kachru の内部圏 (ENL) の英語変種として、もう一つ、「アイルランド英語」をモジュール開発の対象として選定した。アイルランド英語

は TOEIC のリスニング問題に使われていない英語であるが、JET プログラムによる ALT の招致数は、上記 5 カ国の次に南アフリカと並び、アイルランド共和国からも多数に上ることから、アイルランド英語を選定した。

さらに、アジア英語については「シンガポール英語」と「インド英語」を選定した。シンガポールの人口は約 547 万人であり (Statistics Singapore, 2014)、シンガポール英語話者は数こそ少ないが、ジェトロの調べによれば、2013 年度、一人当たりの GDP は 54,776 米ドルと世界でも上位に入り、国際金融センターランキングは世界第 5 位、さらに、金融資産 100 万ドル以上保有する富裕層の割合が 6 世帯に 1 世帯、と世界一高い経済大国である。また、日本企業のシンガポールへの進出は近年目覚ましく、Kachru のいう外部圏の ESL 諸国のなかで最も日本からの輸出額が多く、在留邦人も 3 万人を超え、群を抜いて多い¹⁵⁾。こうしたビジネスの動向だけではなく、シンガポールは観光立国としても注目され、同国に観光目的で訪れる日本人も多いことから、シンガポール英語に接し、関心を持つ日本人は多いと見込まれる。

他方で、インドは、シンガポールほど日本からの輸出額と在留邦人数は多くないが、1990 年代以降 IT 部門が成長し、英語教育を受けた熟練労働者が IT や金融サービスなどの分野において世界的に活躍している¹⁶⁾。約 12 億という世界第二の人口を有するインドでは、教育レベルの高い国民は高度な英語運用能力を有する。1 億人を超えると推定されるインドにおける英語話者の数は、内部圏の ENL に属するアメリカ合衆国以外の国々の英語話者よりも多い、と見ることができるため、「インド英語」をモジュール開発の対象として選定した。

外部圏の英語は、日本の学校教育で最もよく使われるアメリカ標準英語とは、発音、語彙、文法、語用論などすべての側面においてかなり異なる変種である。人間は聞き慣れない、あるいは規範から逸脱していると思う言語変種に遭遇したとき、それについて「正しくない」あるいは「劣っている」、といった主観的価値判断を下す傾向がある。本英語モジュールにアジアの英語を含めた理由は、外部圏の英語も内部圏の英語と並ぶ、1 つ

の英語変種であるという認識を高めて欲しいからである。世界にみられる英語の多様性に目を向け、それを尊重し、それぞれの英語の特徴を理解すれば、より深いコミュニケーションに繋がるはずである、というメッセージがその背後にはある。シンガポール英語とインド英語のモジュール開発は、日本の学校教育での学習よりも、むしろ、アジアでビジネスに携わる日本の企業人たちの役に立てれば、という願いを込めて開発を進めている。

3. 社会言語学的変異研究に基づいた教材開発

「英語モジュール」は、現代英語の社会言語学的変異に関する研究に基づき、その研究成果を英語教育に応用し、現代英語の多様性を学習することができるウェブ教材として開発されている。東京外国語大学のウェブ教材「TUFS 言語モジュール」(詳細については本特集の川口の論考を参照)で培われたハードとソフト両面の技術と数多くの英語ネイティブ教員を抱える神田外語大学の人的資源とを融合させ、大学レベルの学習者のみならず、社会人や中高生などの一般人をも対象として開発を進めている。TUFS 言語モジュールでは、すでにフランス語、ドイツ語、中国語、アラビア語で「方言版」が開発、公開されており、英語の多様性への関心が高まるなか、日本で最も学ばれている英語こそ「方言版」があってしかるべきという声が開発者たち、そしてユーザーたちからも上がり、英語の多変種版の開発に至ったのである。

資金面では、2011年に神田外語大学研究助成を受けて始動し、2012年、『社会言語学的変異研究に基づいた英語会話モジュール』と題し、4カ年計画で日本学術振興会の科学研究費(科研費)助成事業(基盤研究(B)、課題番号24320106)として採択された。なお、TUFS 言語モジュールは〈会話モジュール〉、〈発音モジュール〉、〈語彙モジュール〉、〈文法モジュール〉の4つから成るが、英語モジュールでは、科研費によって〈会話モジュール〉を、神田外語大学の助成金によって〈発音モジュール〉と〈語彙モジュール〉を開発している¹⁷⁾。

英語〈会話モジュール〉開発のプロセスは以下の5つのステップから成る。

①開発対象となる英語変種の調査・分析

開発対象となる英語変種について、音声学や社会言語学などの分野における先行研究を分析し、それぞれの英語に特徴的な社会言語学的変異を選定し、その代表性について複数の研究者からの意見・アドバイスを得る。次に選定された変異を実現する語彙、語法のリストを作成し、実際の英語コーパス（話し言葉と書き言葉の両方を含む）のなかで、それらが言語運用の観点からも変異形と見なされるかどうかを調査する。最終的に英語会話モジュールのなかに記載されるべき変異形を語彙、語法とともにリスト化する。

②会話スクリプトの作成

TUFS 言語モジュールの 40 の言語機能（挨拶する、感謝する、注意をひく等）に合う状況設定を行い、上記の変異形を用いた 40 会話を作成する。会話スクリプトの作成は、当該地域を出身とする研究協力者¹⁸⁾が担当し、それを本研究の研究者が調整し、当該地域の英語を専門とする海外協力者が監修する。

③スタジオ収録

神田外語大学あるいは東京外国語大学でスタジオ収録を行う。アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語、カナダ英語のモジュールは、当該国を出身とする神田外語大学 ELI 教員が出演者となり、神田外語大学でスタジオ収録した。シンガポール英語については、シンガポールを出身とする ELI 教員がいなかったた

神田外語大学におけるスタジオ収録風景



め、在日のシンガポール人学生や社会人が出演し、東京外国語大学でスタジオ収録した。

④英語字幕、日本語訳、発音記述、語彙記述

日本人研究協力者(言語研究を専門とする大学院生、あるいは翻訳家)が英語字幕と日本語訳を作成する。また、英語音声学を専門とする日本人研究協力者が動画の音声の発音を分析して記述し、英語学を専門とする日本人研究協力者が当該英語変種に特有な語彙を記述する。それを本科研の研究分担者と代表者が監修する。

⑤ウェブ化

ウェブ化は東京外国語大学の「TUFUS 言語モジュール」の「会話モジュール」用のウェブ入力システムを利用し、両大学の技術者がそれぞれのウェブページを作成する。

各英語(コンテンツ)に含まれる40の言語機能をもつ会話の前半の20会話(1.挨拶する~20.人を紹介する)では、各国の文化や状況を反映させ、その英語固有の語彙や語法を多く含む会話を集めたスクリプトで構成している。他方、後半の20会話(21.感謝する~40.助言する)では、部分的に語彙や表現をその国のものに変え、その国固有の発音で会話がなされるものの、基本的には同じスクリプトで構成されている(40会話をリスト化した表は本特集の川島(笹原)稿に掲載)。

各英語のモジュールは神田外語大学と東京外国語大学のウェブサイトで公開されている。本稿では、神田外語大学の英語モジュール・ウェブサイトでそのコンテンツを見てみよう(「英語モジュール」で検索)。

まず国別のコンテンツを選択し、次に前述の40言語機能からひとつを選択すると、ひとつの画面に、テキスト部分(日本語訳と英語)と動画部分が表示される(図2)。登場人物AとBの会話は、片方だけもしくは両方の音声を消すこともできるため、声を出して学習するのに便利にできている。さらに、テキスト毎についているページアイコンにマウスオーバーすると、単語の意味と発音の特徴についての説明が表れる。これも、各国の特徴的発音が高校生や一般のビューアーにもわかりやすいように、一部カ

KANDA×TUFUS 英語モジュール

図 2. 神田外語大学の英語モジュールのウェブページ
（「アメリカ英語会話モジュール」1. 挨拶する）

The screenshot shows the website interface for the English Modules Dialog. At the top, there are logos for KANDA and TUFUS, and a language selection dropdown set to 'アメリカ英語'. Below the navigation bar, there are buttons for '英語モジュールの使い方' and 'English Modules Dialog'. The main content area is divided into two panels: 'TEXT' and 'MOVIE'. The 'TEXT' panel displays a dialogue between two people with multiple-choice options (A and B) for each line. The 'MOVIE' panel shows a video player with a play button and a progress bar. Below the video player, there is a note about the page icons and a search function.

タカナ表記を用い、他方で、大学の授業でも使えるように国際音声記号や専門用語（「有声」「長母音」「声門閉鎖音」など）も表記されている。

英語モジュールの語彙記述については本特集の川島（笹原）稿、発音記述については新城稿で詳しく解説しているので、本稿では英語会話モジュールの特徴を次のように簡潔にまとめるに留める。

- 1) 日本人が近年接するようになった多様な英語変種の「違い」を学ぶことができる動画付きのウェブ教材である。
- 2) 母語話者同士の自然会話という場面設定のため、発話速度が英語学習教材としてはかなり速い。

- 3) 「モバイル版」があるため、通勤・通学時にも利用でき、利便性が高い。
- 4) 英語音声学、社会言語学、言語教育学などの専門分野の研究に基づいた学術的な教材である。
- 5) 大学の教材としても活用でき、高校生や社会人など一般の学習者にも理解できるように開発されている。
- 6) 公費(日本学術振興会科学研究費)と大学助成金を受領したため、無料でインターネット配信が可能となっている。

4. 本特集について

本特集は、日本人英語学習者が英語モジュールを活用することによって、世界の多様な英語の違いを理解し、尊重することを願って、英語モジュールの開発に関わった研究者たちが寄稿したものである。

川口裕司による「TUFUS 言語モジュールと言語変異」は、氏が2002年に開発を始めた TUFUS 言語モジュールの歴史、特徴、機能について概説し、言語の「標準版」のモジュールに加え、社会言語学的変異研究に基づいた「多変種(方言)版」の言語モジュール開発の必要性について説いている。川口はフランス語モジュールを例に、フランス(標準版)、ケベック、南仏、スイスのフランス語の語彙、発音、統語の違いについて分析し、実際の言語使用に見られる複数の慣用と言語規範について考察している。

続く二本は、研究協力者として語彙分析を担当した川島(笹原)志保美と発音分析を担当した新城真里奈による論考である。川島は、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語の4変種の語彙の相違点と類似点について体系的に整理し、英語モジュールの語彙説明を解説している。他方で、新城は、上記4変種にカナダ英語を加えた5変種の発音の違いを分析し、発音説明を記述するにあたって、どのような語句および発音に説明を付けたのか、どのような形式で記述したのかを解説している。両稿とも、実際の英語モジュールのウェブページ上に掲載している例を提示しながら説明している。

矢頭典枝による「英語モジュールに見るカナダ英語の特徴」は、カナダ

英語をアメリカ英語とイギリス英語と比較し、その類似点と相違点について英語モジュールに出てくる語を中心に論じている。また、きわめて類似しているカナダ英語とアメリカ英語の差異化とカナダ人のアイデンティティの関係についても考察している。

続く二本の英語論文は、多様な英語変種の発音に関するものである。斎藤弘子による“Vowel Shifts of English”は、音声学の立場から英語の変種に見られる母音の変化の傾向について論じている。ここでは、15～18世紀にかけてみられた「大母音推移 (Great Vowel Shift)」、近年、アメリカ英語の標準発音とされる「一般米語」とは若干音色が異なる発音をもたらしたアメリカ北部の「北部都市母音推移 (Northern Cities Vowel Shift)」と「カナダ推移 (Canadian Shift)」、さらに、標準オーストラリア英語の単母音の変化、現在進行中の標準イギリス英語の母音変化について触れられている。

Jacques Durand, Sylvain Navarro, Cécile Viollain による“R'-sandhi in English: how to constrain theoretical approaches”は、非 R 音性的な (non-rhotic) 英語変種¹⁹⁾にみられる /r/ の二つの音変化——「連結 (リンキング) の /r/ (linking-r)²⁰⁾」と「介入の /r/ (intrusive-r)²¹⁾」——を音韻論の立場から分析した論考である。分析対象として、Durand 氏を中心にフランスで開発されてきた「現代英語音韻論 Phonologie de l'Anglais Contemporain (PAC)」プログラムに収められている「ランカシャー (イングランド北西部)・コーパス」と「ニュージーランド・コーパス」が使われている。なお、「連結の /r/」と「介入の /r/」について、本特集の新城稿 3.4. でわかりやすく解説しているので、それを参照されたい。

これまでに公開されてきた5つの英語会話モジュールは、本科研の研究代表・分担者だけでなく、スクリプト作成者、出演者、ウェブ技術者、言語分析担当の研究者、など数多くの協力者たちが総力をあげて開発した他に類を見ない英語教材である。英語モジュールが日本中で広く活用されることを信じ、今後も開発を続けていきたい。

英語モジュール・チーム一同

研究班：関屋康(研究代表者、神田外語大学)

川口裕司、斎藤弘子、吉富朝子(研究分担者、東京外国語大学)

矢頭典枝、フィリップ・マーフィー(研究分担者、神田外語大学)

海外アドバイザー：J. K. チェンバーズ(トロント大学)

技術・ウェブ構築班：今岡幸美、中村道明、大澤篤(神田外語大学)

大村香、梅野毅(東京外国語大学)

撮影班：大澤篤、的場洋介、小泉真理、益田明菜(神田外語大学)

大村香、梅野毅(東京外国語大学)

字幕、発音・語彙分析担当：新城真里奈、川島(笹原)志保美、

黒岩健人

謝辞

本特集の論考は、日本学術振興会の科学研究費助成事業『社会言語学的変異研究に基づいた英語会話モジュール』(基盤研究(B)、課題番号 24320106)による研究成果の一部である。

注

- 1) 2014年現在、42カ国よりJET第28生4,101人が来日している。JET Programme「JETプログラムの歴史」閲覧日：2014年8月23日(<<http://www.jetprogramme.org/jj/introduction/history.html>>)
- 2) 神田外語大学 English Language Institute (ELI) に所属する語学専任講師。ELIは1989年に設立され、当初、語学専任講師は4名のみであった。現在の73名のなかには英語を母語としないが、母語話者に匹敵する英語運用能力を持つ教員も採用されている。ELI設立から現在にいたるまで、ELI教員およびラーニング・アドバイザー(Learning Advisor: 学生の自主学習をサポートするチューター)は総計284名にのぼる。
- 3) この点に関しては吉富(2013:128)を参照されたい。
- 4) 川口は、「規範」を「言語記号のいくつかの機能を主観的あるいは組織的に特化しようとする意図を表現するための概念」と定義づけ、「言語教育における規範意識は顕著である」とし、「たとえば授業の中では、誤用が矯正され、試験においては得点という形で間違った人に罰則が課せられる」と論じている(川

- 口、2002、p. 52、61)。また、Milroy & Milroy は「規定 prescription」という語を用い、それは「言語使用を含め、すべてが「正しい」方法でなされなければならないという考えに基づく」としている (Milroy & Milroy、2000、p. 1)。
- 5) たとえば、ある高校では、ウェールズ出身の ALT 教員の発音が気に入らないとして、生徒たちの保護者から苦情が出たという。また、ある小学校教諭との懇談で「総合学習の時間で、フィリピン人の先生が英語を教えているが、発音が普通の英語と違うのが気になっている」という声が聞かれた。(2013 年 8 月 1 日神田外語グループ《教科書に載っていない世界の授業 2013》福島会場における来場者との懇談より。)
 - 6) B. B. Kachru, *The Other Tongue* (Chicago: Illinois University Press, 1982) や Peter Trudgill and Jean Hannah, *International English: A Guide to Varieties of Standard English* (London: Edward Arnold, 1982) が先駆的であった。また、学術誌 *World Englishes* は 1981 年に創刊された。
 - 7) B. B. Kachru, “Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle,” in R. Quirk & H. Widdowson, eds., *English in the World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985) 12.
 - 8) 2010 年のシンガポール国勢調査によれば、人口の約 8 割を占める多数派の中国系国民については、50 歳代以上は、家庭内で福建語や広東語などの中国語方言を話す人が多く、20-40 歳代は華語(北京語をベースにしたシンガポールの公用語の一つ)と英語(前者の方が若干多い)、10 歳代以下は英語を話す国民が多い (Statistics Singapore 2010)。つまり年齢が低いほど家庭内でも英語を話す傾向が強い。また、世帯収入と学歴が高い家庭ほど家庭内で英語を使う傾向が強いことも確認された (矢頭、2015)。
 - 9) 主なものとして Jennifer Jenkins, 2003, *World Englishes: A Resource Book for Students*, (London: Routledge, 2003); Braj. B. Kachru et al., eds., *The Handbook of World Englishes* (Cambridge: Blackwell, 2006); Andy Kirkpatrick, *World Englishes* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007) を挙げておく。
 - 10) 本学会のホームページのなかの「創設者挨拶」より (<http://www.jafae.org>)。
 - 11) 本名信行『アジアをつなぐ英語——英語の新しい国際的役割』(アルク、1999 年)や『英語はアジアを結ぶ』(玉川大学出版部、2006 年)など。
 - 12) 本名信行『世界の英語を歩く』(集英社新書、2003 年)、田中晴美・田中幸子編『World Englishes 世界の英語への招待』(昭和堂、2012 年)、ジョゼフ・コールマン著、渡辺順子訳『いろいろな英語をリスニング』(研究社、2008 年)など、数多い。
 - 13) 2014 年 11 月 13 日、神田外語大学にて開催された「TOEIC と英語モジュール」と題するシンポジウムで、パネリストの一人、神崎正哉氏が TOEIC で使われる英語変種でリスニングの問題を聴衆に聞かせ、意見を尋ねたところ、オ

- セアニアの英語が最も聞きにくい、という意見が多かった。
- 14) ロンドン以東のテムズ河の河口域から広まったことから「エスチュアリー」(「河口」という意味)という名がついた(竹林・斎藤、1998:6)。
 - 15) 2013年度、シンガポール、マレーシア、フィリピン、インドへの日本の輸出額は、順に、21,100米ドル、15,331米ドル、9,745米ドル、8,617米ドルであった。また、在留邦人の数は、同じ順に、31,038人、20,444人、17,948人、7,132人であった(日本貿易振興会(ジェトロ) <http://www.jetro.go.jp/world/asia/>)。
 - 16) インド経済の動向に関し、詳しくは <http://www.jetro.go.jp/world/asia/in/#business> を参照。
 - 17) 2014年末現在、「アメリカ英語とイギリス英語の語彙の違い」が公開されている。
 - 18) アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語のスク립トは、神田外語大学 ELI の英語ネイティブ教員が作成した。また、カナダ英語のスク립トは University of Toronto の社会言語学専攻の院生が作成、シンガポール英語のスク립トは National University of Singapore の英語学専攻の院生が作成した。アイルランド英語のスク립トは、2014年末現在、University College Dublin の言語教育学専攻の研究者が作成している。
 - 19) “car” や “cart” といった語で、母音の後に来る(そして、その後に母音が続かない) /r/ が発音される英語変種は R 音性的な (rhotic、あるいは r-full) 英語変種であり、アメリカ英語とカナダ英語がそれに当たる。これに対し、前述の語で、/r/ が発音されない英語変種は非 R 音性的な (non-rhotic、あるいは r-less) 英語変種であり、イギリス英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語がそれに当たる。
 - 20) 「連結の /r/」については、例えばオーストラリア英語会話モジュールの「24. さよならをいう」に出てくる “your own house” の発音説明として、「通常、語末の “r” は豪英語・英英語では発音しないが、“your” は母音から始まる語 “own” と繋がられているため、“r” が発音されている」と記述されている。
 - 21) 「介入の /r/」については、例えばオーストラリア英語会話モジュールの「38. しないでくれという」に出てくる “awe of” の発音説明として、「“awe of” が繋がって発音されているが、母音の連続を避けるため、間に /r/ を挿入している。その結果、「オーロヴ」のように聞こえる」と記述されている。

参考文献

- Jenkins, Jennifer (2009). *World Englishes: A Resource Book for Students*, London: Routledge.
- Kachru, B. B. (1982). *The Other Tongue*, Chicago: Illinois University Press.
- Kachru, B. B. (1985). “Standards, codification and sociolinguistic realism: The English

- language in the Outer Circle,” in R. Quirk and H. Widdowson (eds.), *English in the World* (pp. 11–30). Cambridge University Press.
- Kachru, B. B. et al., (eds.) (2006). *The Handbook of World Englishes*, Cambridge: Blackwell.
- Kirkpatrick, Andy (2007). *World Englishes*, Cambridge University Press.
- Milroy, James & Lesley Milroy (2000). *Authority in Language*, London: Routledge.
- Statistics Singapore (2010). “Table 47: Resident Population Aged 5 Years and Over by Age Group and Language Most Frequently Spoken at Home,” *Census of population 2010*, Department of Statistics Singapore.
- Statistics Singapore (2014). “Latest data- Population & land area,” Department of Statistics Singapore.
- Trudgill, Peter & Jean Hannah (2008). *International English: A guide to Varieties of Standard English (5th edition)*, London: Hodder Education.
- 新城真里奈、矢頭典枝 (2014) 「大学における英語変種を教える試み——TUFS×KANDA 英語モジュールの開発を事例に——」『外国語教育研究』第 17 号、外国語教育学会、127–146 頁
- 川口裕司 (2002) 「言語にとって規範とは何か」『語学研究所論集』第 7 号、東京外国語大学語学研究所、49–73 頁
- 竹林滋、斎藤弘子 (1998) 『英語音声学入門』大修館書店
- 矢頭典枝 (2014) 「カナダ英語の特徴に関する一考察——日本人英語学習者の言語意識の視点から——」『カナダ研究年報』第 34 号、日本カナダ学会、37–56 頁
- 矢頭典枝 (2015) 「シンガポールの言語状況と言語教育について——現地調査から——」平成 24–26 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 (B) 研究プロジェクト報告書 『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究』、59–75 頁
- 吉富朝子 (2013) 「英語教育における言語規範」『外国語教育研究』第 16 号、外国語教育学会、124–132 頁